



現在、旧南山手乙27番館は「長崎市南山手レストハウス」として公開されているが、悲運の志保井ウタのことはほとんど知られていない(筆者撮影)

長崎居留地
ドキュメント
ブライアン・パークガフ二

南山手乙27番館の人々

ガワ―と暮らした日本人女性

■36■

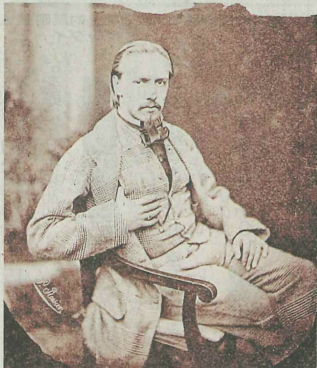
長崎港を一望できる旧南山手乙27番館は、国指定重要文化財の旧オルト住宅に匹敵する、幕末に建てられた木骨石造建築の貴重な歴史遺産。現在は「長崎市南山手レストハウス」として公開されているが、長崎市民にも観光客にもあまり注目されていないのが現状である。

明治11(1878)年、借地権と建物の所有権は英人技師エラスムス・ガワ―の手に渡った。イタリヤ生まれのガワ―は、慶応3(1867)年に鉱山事業の監督官として徳川幕府に雇われ、北海道や佐渡島の鉱山開発を指導していた。佐渡で雇われていた間、彼は志保井ウタという日本人女性と同居し、雷吉と重要という2人の息子の父となった。明治9(1876)年、彼は高島に隣接する双子島に立て坑の掘削作業を監督するために来崎するが、その際、ウタと2人の息子に付き添われ、南山手

長崎英国領事館の記録によると、グラバー商会が元治元(1864)年に南山手乙27番地の1362坪の借地権を取得し、翌々年、トーマス・グラバーの弟アレクサンダーが現在も残る邸宅を建てたという。



明治中期の長崎で撮影されたガワ―夫人(旧姓ガワ―)(筆者蔵)



エラスムス・ガワ―の弟エイベルは幕末期に駐長崎英国領事を務めた(長崎英国領事館資料)

息子2人と娘も同居

乙27番館に彼らと一緒に同居した。

長崎県が明治14(1881)年に行った外国人住民調査の資料には、南山手乙27番地に「エラスムス・ガワ―と女性」が住んでいたと記されている。この女性は、名前こそ明記されていないが、間違いなく志保井ウタだった。翌年の調査表には南山手乙27番地にガワ―と女性の他に「パイ夫人」と同じ住所に住んでいると記されている。

パイ夫人とは、ガワ―が英国での前の結婚で授かった娘カロリーナのことである。彼女は、中国のアモイに駐在していた英国人商人エドモンド・パイと結婚したが、夫が急逝したため、父の下に身を寄せていた。

重要な孫に当たる志保井利夫は、太平洋戦後に北見工業大の教授と地質学の權威として出世し、昭和54(1979)年「エラスムス・H・M・ガワ―とその係累」(文化総合出版)と題した冊子を発表した。この出版物がなければ、曾祖父の功績だけでなく、曾祖母の志保井ウタの波乱に満ちた半生も、歴史の陰に埋もれてしまっていたことだろう。(グラバー園名誉園長)

一家は幸せに暮らしていたようだが、翌々年の住民調査ではガワ―の名前が消えており、「女性」だけが南山手乙27番地に住んでいる。このことから、ガワ―は長崎を引き上げ、ウタと息子たちを南山手に置き去りにしたことが分かる。彼が日本を去った理由は不明だが、明治35(1902)年にイタリヤの故郷リヴォルノで死亡したという記録がある。

一方、カロリーナは明治16(1883)年、父親が長崎を去ったその年に長崎の豪商フレデリック・リンガーと結婚。その後、彼女は志保井ウタが東京で新たな生活を始めるのを助け、義理の弟たちをその後も支援し続けた。雷吉はやがて英国国籍を取得して蒸気船の機関士として活躍し、重要は日本に残り、結婚して家庭を築いた。